赤根武人の冤罪

不遇の志士を通して描く
明治維新史の裏面！

村上　磐太郎
Murakami Hantaro

マツノ書店

のために師匠雲浜は今投獄されている。その弟子の自分が頭をかかえて逃げて行ってよいものだろうか、師雲浜は平生からそんなことを教えて居らぬ筈だ。吉田松陰は雲浜を評して「靖献遺言に羽織を着せたような男だ」と言ったが、靖献遺言は望楠塾学派の金科玉条である。靖献遺言にはこのまま指をくわえて引込んで居ろとは書いてない。武人は破牢救出の策を考え初めた。

武人は性格的には所謂前弱い方の質だったが、思いつめると正を執って初志を曲げず、内攻的に執拗に己れを通そうとする人のようである。所謂陰頑の類で、勢に阿（おもね）って附和雷同する性格がなかったので後に孤立に陥り中途にして斃れてしまった。

武人のそうした性格を語る逸話は多い。山田とみ子は、子の無かった雲浜の姪で養い子となっていた。雲浜の入牢後も志士たちの汚れ物の洗濯や繕いものなどの世話ををしていた。その内に親戚たちの世話で雲浜の旧主である京都所司代酒井侯の奥女中に入った。文久三年志士の間に所司代暗殺のたくらみが企てられ、とみ子は長州の志士久坂たちからその手引きを頼まれた。忠義と大義の間に挟まれたとみ子は思い余って来合せた武人に相談した。武人は「今酒井を斃した処で直接大勢を転

内容見本

破牢

安政の大獄で梅田雲浜を召捕りに来た捕吏に踏込まれた時、居合せた弟子の赤根武人が、咄嗟の間に同志からの手紙や証拠となるような書類を巧みに処理して累犯の広がるのを防いだ事は誰もよく聞き知っている話である。

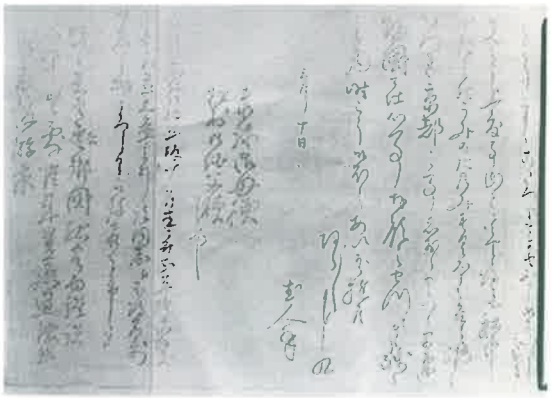
其の後武人は雲浜の家族等と一緒に町預けとなった。そのことが京都の長藩邸に知れたので、留守居役の福原与三兵衛から申立てて町預けは差除かれた。処が京都で愚図愚図している間に又町預けに引戻された。それはその後雲浜の留守宅を家探しした処、「後醍醐天皇の何とかに武人の名前があった」と言うのだから、武人の書いた後醍醐天皇論の文稿に幕府非難の文句が有ったとでも言うことだろう。之も大した事でもないので間もなく放免された。安政五年九月十七日のことである。今度はすぐ京を離れて西下して行った。

京を発ったものの武人の胸は納まらなかった。勤王攘夷は天下の正義である。そ

内容見本

武人の故郷柱島の港（岩国市）

武人の奇兵隊総督辞任願い草稿



武人の母、伯父あて書簡　末尾部分

目次

①破牢
②要駕策
③万延から文久まで
④馬関防衛
⑤武人の苦悩
⑥吉川監物
⑦周布政之助の憤死
⑧西郷隆盛の翻意
⑨筑前藩の周旋
⑩西郷窮地に追込まる
⑪高杉の挙兵と赤根の失踪
⑫内戦終結の奔走
⑬薩長連合と赤根
⑭淵上郁太郎のこと
⑮誰が長藩を救ったか
⑯赤根淵上の上阪就縛
⑰永井尚志の方寸
⑱斬首
㊟秋良敦之助の汽船建造

■体　裁　A5判並製箱入　324頁
■特　価　四千円（税込・〒340円）
（特価締切二月十日　定価五千円）
■発　売　平成十九年一月十日
限定五百部
▼刊行と同時PRにつき売切の節はお許し下さい
▼書店不卸　▼返本OK
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店
URL http://www.matuno.com

■長らくお待たせ致しました。本書は一坂太郎と蔵本朋依の両氏に依頼して、殆ど原文通りに新しく組み替えたものです。

■**著者略歴**　明治31年生、昭和55年没。早くから万葉集・宗教史・古代史・郷土史等の研究を志した柳井地方郷土史研究の開拓者。家業の酒造業を継ぐかたわら若山牧水に師事し、可卿と号す。銘酒「幾山河」の醸造主。本書以外の主著に『周防灘圏の上代交通路と邪馬台国』（自家版）。『村上可卿歌集』。共著『柳井市史』（通史編、各論編　柳井市役所）『維新の先覚月性の研究』（マツノ書店）ほか。

武人の生家遺構。現在は解体されて無い

（写真提供　一坂太郎氏）

強いエネルギーがみなぎる一冊

萩市特別学芸員　一坂　太郎

奇兵隊総督を務めた赤禰（根）武人は慶応二年（一八六六）一月二十五日、「不忠不義の至り」の罪科により山口鰐石で処刑された。二十九歳だった。

赤禰の罪を疑問視する声は、当時からあった。赤禰自身も獄衣の背に「真は誠に偽に似、偽は以て真に似たり」と記していたというが、結局一度の審判も行われなかったので真相は闇に葬り去られた。

だから明治の終わりになると、遺族が贈位による復権運動を起こした。しかし奇兵隊出身の元勲である山縣有朋や三浦梧楼の妨害があり、頓挫する。昭和十年代にも、赤禰の生誕地柱島を管轄する岩国市挙げての顕彰活動が行われたが、贈位実現には結び付かなかった。

このたびマツノ書店から復刻される『赤根武人の冤罪』（山口県柳井市立図書館発行）もまた、赤禰復権を目指し著された。著者村上磐太郎は赤禰家とゆかりの深い、柳井市の郷土史家だ。その表題にあるとおり、あくまで赤禰は冤罪を被せられたとの姿勢で貫かれている。

この本の元版表紙には「明治百年記念」の文字が入っている。国が明治百年記念式典を行なったのは、昭和四十三年（一九六八）十月のことだ。ところが、奥付の発行日は「昭和四十六年八月二十日」とある。式典から三年も後の「記念出版」だ。

これは、赤禰などとは無縁の場所で行われた明治百年のお祭り騒ぎに、著者が突き付けた、アンチテーゼの刃だ。遅れていようが、「明治百年記念」と入れた所に、著者の並々ならぬ思いを見る気がする。

本書では今日でも「回天義挙」と絶賛される高杉晋作の下関挙兵を、「暴発」「無謀な兵」などと一刀両断する。これが、基本の視点だ。晋作の挙兵は、それまでの赤禰の周旋を踏みにじるものであり、「防長二州は更に深い窮地に陥れられた」と評する。通りいっぺんの維新正史とは正反対なので、衝撃を受ける読者もいるだろう。

しかし、本書は多くの史料を駆使するものの、学術論文の体は成していない。語り口が特別上手いというわけでもない。感情に任せ、書き進めたような部分も多々見受けられる。史料の出典も曖昧だ。

にもかかわらず、マツノ書店の復刻希望アンケートではつねに書名が挙がる。刊行三十数年を経てなお、根強いファンの多い本だ。

それは、凡百の歴史書には見られない強いエネルギーが読者を圧倒するからだろう。なんとか赤禰を復権させたい！維新正史に異議を唱えたい！という、一途なエネルギーである。いくらすぐれた学術論文でも、これがなければ人の心を打つことは出来ない。

だから本書は、作家の創作意欲をもかき立てる。童門冬二氏は本書から刺激を受け、『志士の海峡』（昭和六十年、のち文庫化で『奇兵隊燃ゆ』と改題）という、赤禰を主人公にした小説を著した。

自分の立つ場所をはっきりと主張した、良い意味での「郷土史家」の仕事だ。この度の復刻によりさらに広く読まれ、著者の志は未来に伝えられてゆくに違いない。